

前回の評価委員会における業務実績見込に係る両学長・理事の説明要旨

○ 愛知県立大学（久富木原学長）

【項番 1】2024年度までに全学部連携型授業を 4 科目、複数学部連携型授業を 4 科目開講することを目標としている。これまでの実績としては、過去 4 年間でⅣ評価が 3 回（2022年度は自己評価）となっている。これまでの実績を考慮して、今後の見込を考えると、来年度までに予定通り順調に新教養教育プログラムを進めることができる。そのようなことから、指標を上回って実施することができる見込みがあることから、自己評価Ⅳとした。

【項番 4】これまでの実績としては、過去 4 年間でⅣ評価が 1 回しかない。これがなぜ 6 年間の見込評価がⅣになるかであるが、最初の 3 年間はⅢ評価である理由としては、新しいカリキュラムを考えるために、まず大学全体や各学部として、3 ポリシーの見直しを行わなければならない。ポリシーを見直すなかで、どんなカリキュラムにしたら良いのかやコースをどのように再編すれば良いのかといったことをじっくりと議論を重ねていく必要があり、これには 3 年間程度どうしてもかかってしまう。なので、準備段階の 3 年間はどうしてもⅢ評価になってしまう。2022年度においては、準備段階が終了し、これまで検討してきたことを実行する段階に移ったので自己評価Ⅳ評価とした。Ⅳ評価は 1 つしかないが、検討を重ねた結果、2022年度にカリキュラムの見直しが実現して、実際に開講したということで、2023、2024年度にはさらに充実した内容にすることができるという見通しがある。1 つの例としては、外部資金の獲得を行うなど、特色ある教育を行っている。以上から、6 年間の見込として、自己評価Ⅳとした。

【項番 5】これまでの実績としては、最初の 2 年間でⅢ評価で、次の 2 年間でⅣ評価（2022年度は自己評価）となっている。これは、最初の 2 年間は準備・検討段階で、2021年度からは、カリキュラムが完成して、準備検討したものを実践しているということでⅣ評価となっている。コミュニティ通訳学コースだけでなく、人間発達学研究所とか情報科学研究科では、学外との連携を含めたカリキュラムの見直しをしていたり、看護学研究科では保健師の養成課程を開設している。このような特色ある研究科の教育が順調に2023年度以降も継続

することが見込まれるので、全体として自己評価Ⅳとした。

【項番18】これまでの実績としては、最初の1年間はⅢ評価で、残りの3年間はⅣ評価（2022年度は自己評価）となっている。これは、2019年度には、学長特別研究費の運用方法を変更して、2020年度以降は、それを実際に適用して、教員が新たに申請して研究を実施するという仕組みを構築して、継続的に運用するという流れで来ている。実際に指標をクリアして、実績も出ているということで、今年度以降も右肩上がりで推移していく見込みである。以上から自己評価Ⅳとした。

【項番19】これまでの実績としては、前半の2年間はⅢ評価で、後半の2年間はⅣ評価（2022年度は自己評価）となっている。これも、前半の2年間は準備段階であった。2021年度に研究推進局を立ち上げたのだが、これは新たな部局をただ立ち上げたのではない。立ち上げる前に、全ての研究所を無くすという大きな決断を行った。また、それまで研究所が実施してきたことのデータを集めるということを行った。中には、研究所が似たような研究を行っていることもあったので、それらを全て集めて、それを研究所に示して、理解をしてもらった。新たな研究所を作るにあたり、既存の研究所は当然だが、全学的に説明を行わなければならない。それに2年間かかったということである。2021年度によりやく研究所改革が形あるものになり、その上で学長ビジョンに基づく学部連携、産学公連携の研究の奨励や外部資金による研究活動を全学的に進めるための研究体制の構築を進めた。それまでは学部ごとに研究所があったため、学部ごとの壁が大きかった。その壁を取り除くために、学部ごとの研究所を全て無くす必要があった。構成員に納得してもらうための2年間であった。新体制を作り、2021年度からスタートした。新しい研究所は学部には付属せず、学外の機関と連携しなければならない。あるいは学内において複数学部と連携しなければならない。そういう条件を付けて、新しい研究所を立ち上げた。そうしたら、新しい研究所の半分以上が、外部資金だけで運営ができることになったので、2021年度からⅣ評価ということになった。それが今でも続いている。そのほかにも、科研費や外部資金を得るための申請サポートも実施しており、その効果も数字として出ている。以上から、6年間の全体として、自己評価Ⅳとした。

【項番22】これまでの実績としては、2020年度と2021年度がⅢ評価で、2019年度と2022年度がⅣ評価となっている。山と谷があるような状況だが、どういうことかという、最初の年は、地域連携センターから県の各部局すべてと県内市町村を対象として、連携事業に関するアンケート調査を実施した。初めてアンケート調査を実施したもので、ニーズを把握することができた。その結果をもとに、意見交換会を積極的に行った。以上が2019年度がⅣ評価の理由である。その後がⅢ評価の理由であるが、意見交換会を行った後、実質的な取組に移行していく訳で、数から質への転換が行われる訳になるが、指標が意見交換会の数となるので、ここに反映させることができなかつたことから、2年間はⅢ評価が続くことになった。また、2022年度になぜⅣ評価になったかという、新たな局面になり、県や市町村の教育委員会との連携協定を積極的に締結して、現在問題となっている事柄について小中学校の課題解決に向けて活動を行った。新たな意見交換会が出来て、実質的な活動も実施できたので、Ⅳ評価とした。今後も、積極的に県等の期待にこたえていくことが出来ると見込まれるので、全体としてⅣ評価とした。

○ 愛知県立芸術大学（戸山学長）

【全 体】全体における共通的な考え方として、2019年度から2022年度までの評価のうち、Ⅳ評価が2つ以上となるものについて、最終評価Ⅳを目指して取り組んでいくという考えである。

【項番41】地域連携・貢献については、県立の芸術大学として最も期待されることである。過去3年間においては、コロナの影響もあり実施が困難なものもあったが、名工大との連携事業の継続や日進市教育委員会と新たに締結した包括協定により、子供たちの成長・生育に、本学が音楽やアートで積極的に関わっていくなど、最終評価Ⅳをもらせるよう、今後2年間の本学の強い意志を示したものである。

○ 愛知県公立大学法人（若原理事）

【項番46】指標については、第三期最終年度までに理事長・学長によるトップマネジメント事業費を業務費増額の1%以上確保するものである。2022年度については、先ほど説明したとおりⅢ評価となっている。今後も同様の状況が続くと考えられるが、知恵を絞り、工夫を行うことで、指標を達成できるよう努力をしていきたい。自己評価

はⅢである。

【項番48】指標については、2大学連携事業を検討・推進するための会議を毎年2回以上開催するというものである。昨年度まで、毎年度2回以上開催をしてきており、今後もする予定である。昨年度新たに実施したスタートアップシンポジウムなど、両大学の連携をはじめ、県と連携した事業を今後も実施していく予定である。来年度以降も指標を達成し、IV評価をもらえるよう推進していく予定であるため、自己評価IVとしている。

【項番52】指標については、第三期最終年度までに海外派遣及び他機関への派遣研修に従事した法人固有職員の割合を30%以上にするものである。2022年度末現在の割合は29.3%となっており、引き続き取り組みを進めて、第三期の最終年度までには30%を達成したいと考えている。自己評価はⅢとしている。

【項番59】引き続き、安全・安心な教育研究環境を維持できるよう取り組みを進める予定である。自己評価はⅢとしている。